

幼兒の生活

附屬幼稚園内

一 保 媽

一、寶物堀り

春も末頃でむしろ夏を思はせる様な日の事でした。

多勢の子供達はあちらでもこちらでも遊んでゐます。その中で貞夫さんと慶夫さん

と一嘉さんの三人がおつむを寄せて何やら

はすにたゞたゞ堀りつゞけます。小さな手は土だらけになつて、甲の方のは乾いてゐました。爪の間には堀が一ぱい入りこんでゐます。三人のおつむにはもう汗さへにじんでゐました。

「それなあに」

と私がきゝました。三人は「寸頭を上げて私の顔を見ましたが直ぐと又堀りつゞけます。

「その出てゐるのは何でせうね」

命に土を堀つてゐるのです。そして一寸程の下には瀬戸物の一部が見えてゐました。三人に私のゐる事にも氣付かず。何も言

とも一度きゝましたら、貞夫さんがさも一生懸命堀つてゐるらしく勢こめた聲で、

「知らないよ」

と。一言云つたなりやつぱりつゞけてゐます。

その中に慶夫さんは

「僕釘を拾つて來やう」

と云つて行きました。貞夫さんも一嘉さんもつゞいて行きました。一震災後の事で澤山の釘や瀬戸物が埋まつてゐたり落ちてゐたりしてゐました。——やがて三人は、今

度は釘を持つて堀りつゞけました。もう餘程深く堀られましたので、

「まだ取れないかしら」

と云つて瀬戸物をゆすぶつて見ましたが

びくともしません。子供達は一向平氣な様子で尙もつゞけます

「ちや先生ねお室へ行つてゐますから堀つてしまつたら見せて頂戴ね」

と云ひ残したまゝ室には入りました。

暫く立ちましたが、まだ何とも云つて来ません。どうしてゐるかしらと思つて窓から見た時はもう三人の影は見えませんでした。

さつきの瀬戸物は花瓶のかけらだつたのです。釘と瀬戸かけと堀り立ての土が子供のしわざらしく残つてゐるだけでした。

二、トンネル

博さんも晁さんも登園早々お室へもは入らずに、お砂場へかけて来ました。お砂場には早く來た三四人の子供が、もうお山つくりをしてゐたのでした。

丁度雨あがりのすがくしい日で、初夏のあざやかな光りは、あすこにもこゝにもきら／＼とさしてゐました。砂の濕りも丁度いゝ鹽梅なので、お砂集めもいつもより

ははかどり、忽ちの中に大きなお山が出来上りました。

「崩れないやうにうんと堅くしませう」

と云つて、ピタ／＼と叩き始めたらみん

なも大悦びで叩き始めます。

博さんと正雄さんはあんまり勢がいいので、向側の貞子さんや浩子さんの側が崩れかけました。

「やあこつちが崩れただぞ」

と云つて、正雄さんと文雄さんが加勢しましたので、漸くの事で平均がとれ、お山

も固くなりました。

私と貞子さんは軒下の乾いてゐる砂を集め来てお山の天邊へ雪を降らせました。

すると秀之さんはこの前の箱庭をつくつた時の事をおぼえてゐたのでせう。

「僕ね苔を取つて來るね先生」

と云つて小笊と宮島を持つて立ちました博さんと浩子さんの二人も

「僕も」

「私も」

と云つて立ち上り、前後して裏庭の方へまわりました。

「先生僕は木をとつて來て植ゑるよ」

と、正雄さんが云へば、僕もと、晁さんも

一緒に、岡の上の雑草取りに出かけましたやがてみんな夫々一杯取つて歸つて来ました。苦はまばらに置かれ、木はこんもりと植ゑられました。その中に文雄さんは

「トンネルをつくらうよ」

と云ひ出しましたので、私は西から、文雄さんは東から堀り始めました。漸くに文雄さんの手が砂の中でわかる様になりました

「あ 文雄さんもう少しですよ。ほうら先

生の手がわかるでせう。ほーらね」

と云つてゐる中に、トンネルが出来ました
大悦びです。額を砂にすりつけて一生懸命
にのぞいてゐます。

「晁君向ふが見えるよ」

と一人々々に紹介しましたので、みんなが
代る代るのぞきこみます。そしてはみんな
がみんな、額を砂だらけにしました。そう
してゐる中に浩一さんが

「こつちからもトンネルを作らう」

と云つて堀り初めました。正雄さんや博さ
んが反対の側から堀り、忽ちの中にこゝも
トンネルになつてしまひました。四方の口
からのぞいては嬉しがります。おしゃもじ
を通すやう木片の汽車を走らせるやら大變
な悦び様でした。珍しく崩れもしないで奇
麗に出来上りましたので、惜しい様な氣持

になつて

「崩れない様に入口をかためませう」

と云つて、みんなで固め出しました。その
中に正雄さんの方の入口がドサツと崩れて
しまひました。一寸手をおいて私の顔を見
てゐましたが

「やあ 崩れた崩れた」

と云ひながらふみつぶし始めました。する
と文雄さんも博さんも浩一さんも秀三さん
も大悦びで上りつぶしてしまひました。

「やあ〜」

と云ひながら手をふり上げ、足踏みして嬉
しがる様、

貞子さんと浩子さんと私はたゞばかんと
して見てゐるだけでした。私の心の何處か
に惜しいと云ふ淡い感じがしてゐました。
そうしてゐる中に正雄さんは藤棚の下の水溜

りに目をつけました。

「ようみんなあすこへ行かうよ」

と云つて走つて行きました。みんなも行か

う行かうと叫び乍ら、くもの子の散る様に、
バアツと向ふの水溜りへ移つて行つてしま
ひました。

○、 手をとつて書かする梶の廣葉かな

虚 子

○、 走馬燈囃せばいよ／＼廻りけり

鳴 雪

○、 名月や池をめぐりて夜もすがら

芭 蕉